

別府市内の特別支援学校と市民等との交流状況について

別府市内の県立特別支援学校の状況

1 各学校の概要

- (1) 別府支援学校（本校）・・・別府市鶴見
〔 児童生徒数37名
小学部・中学部・高等部設置
対象障がい種別：肢体不自由、病弱（通学生） 〕
- (2) 別府支援学校鶴見校（分校）・・・別府市鶴見（別府発達医療センター隣接）
〔 児童生徒数31名
幼稚部・小学部・中学部・高等部設置
対象障がい種別：肢体不自由（入院児童生徒） 〕
- (3) 別府支援学校石垣原校（分校）・・・別府市鶴見（西別府病院隣接）
〔 児童生徒数49名
小学部・中学部・高等部設置
対象障がい種別：病弱（入院児童生徒） 〕
- (4) 南石垣支援学校・・・別府市石垣西（市立境川小学校隣接）
〔 児童生徒数93名
小学部・中学部・高等部設置
対象障がい種別：知的障がい（通学） 〕

2 各学校の交流教育の現状

- (1) 別府支援学校
 - ① 地域との交流
 - *自治会を中心としての運動会、学園祭の案内（年2回）
 - *地域の公民館（扇山・鶴見・南荘園）へ、児童生徒会が花のプランター贈呈（年2回）
 - *地域ふれあい事業で別府市役所に作品展示（年1回）
 - ② 学校間
 - *中学部の青山中学校との学校間交流（年3回）
 - *運動会、学園祭における青山中学校生、別府商業高校生徒のボランティア（延べ約20名）
 - ※高等部の交流は山香農業高校が相手校
 - ※APU学生との交流会実施
- (2) 別府支援学校鶴見校
 - ① 地域との交流
 - *地域ふれあい事業で大分みらい信用金庫に作品展示（年1回）
 - *七夕集會に荘園町老人会の10名が来校して参加（年1回）
 - *別府溝部学園短期大学の学生13名が来校しハンドベルコンサート実施
 - *社会見学の際に別府市「協育」ネットワークボランティアによる移動介助の援助
 - ② 学校間
 - *小学部の南立石小学校との学校間交流（年1回）
 - ※APU学生との交流会実施

(3) 別府支援学校石垣原校

① 地域との交流

※地域ふれあい事業で西別府病院ロビーで作品展示（年1回）

◆本学校に在学しているのは、重心、慢性疾患、精神障がいの児童生徒である。従って、その特性から、外部との交流は物理的、意図的に制限していることが多い。特に、対人関係の問題に関して治療中の児童生徒や、短期間の入院治療により疾病の治癒を目指している場合が多いという特徴がある。

(4) 南石垣支援学校

① 地域との交流

※九州労働金庫別府支店に作品展示をしている。（年1回）

※小学部：児童館職員、中学部：市内在住主婦によるパン教室、高等部：竹工芸教室の開催等、地域の講師を招いての交流（いずれも年1回～2回）

※運動会、文化祭の際の地域の自治会等、近隣住民の招待及び別府大学短期大学、APU学生のボランティアによる行事の児童生徒援助（各々1回）

※中学部の石垣一燈園との定期的交流会（年間3回）

② 学校間

※小学部：隣接する境川小学校と昼休み等の「交流の門」による交流（毎週2回・全体集会は年2回）

※高等部の交流は山香農業高校が相手校

※APU学生との交流会実施

3 市民との交流状況の変化

◎ 以前に比べると、市民は、別府市内に県立の特別支援学校が4校（本校2校・分校2校）があることを知るようになった。また、特別支援学校在学学生及び卒業生に対する偏見や差別も以前より減少しているようにみえる。

<考えられる理由>

- ・支援学校が発信してきた様々な交流行事の成果が現れてきた。
- ・センター的役割（地域の学校で支援を必要とする子どもがいる場合、教師や保護者に対して特別支援学校のコーディネーターが相談・助言等を行うこと）の法的な明確化により、地域の小中学校への支援事例が多くなり、小中学校と支援学校との協力関係が増している。
- ・以前は、県立校に在籍している児童は「地域の子ども」として子ども会名簿に登録されていなかった例もあったが、自治会の理解が進み、地域活動に参加しやすくなってきた。
- ・日中一時支援事業、放課後支援、地域支援事業等の行政支援体制が整備されてきて、働きながら障がい児を養育できる環境が整いつつある。

- 以前と比べて、差別や偏見が改善された面も多いが、市民の特別支援学校への関心が高いとは言い難い。
- 徐々に状況が改善されていることは事実であるが、障がい児がいる家庭では、依然、母親が中心に養育しなければならないのが実態であり、仕事と育児やその後の同居を両立させることは難しい例が多い。
- 地域の学校への支援が充実している反面、早期発見、早期支援が強調されるようになり、健常児・障がい児の相違点を強調する傾向が見受けられる面もある。
- 交流教育は行っているが、行事等の形式的なものになりがちである。
- 軽度の障がいや、見た目にはわかりにくい障がいは、理解されにくい面があり、街に出ることを躊躇する保護者は依然多い。